

---

# DNAクラブ！！

百鬼夜光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DNAクラブ!!

### 【Nコード】

N7471J

### 【作者名】

百鬼夜光

### 【あらすじ】

「卒業したくば勝利しろ。進級したくば勝利しろ。」

他者を蹴落としてまで手に入れる勝利こそ真価がある」

…さて問題だ。こんな戯言を全校生徒の前で堂々と宣言したバカはどこのだいしょうか？

正解は、我らが生徒会長でした。

## 集結するバカ共

俺の名は赤石和希。<sup>あかいしかずき</sup>今回の物語では某人気アニメの○ヨンの存在だ。俺が今いるこのクラスは、<sup>かさしもこうたろう</sup>風下高等学校の1年A組。ちょうど入学式も終わり、帰る者は帰り残っている者は残って話をしていた。

「ああ、退屈だ…」そう嘆いてばかりの毎日だった中学校生活も終わりを告げ、今日から楽しい高校生活を送れるとばかり思っていた。だがそれは大きな間違いで、実際は何も変わらない。教師の話もベタな内容だし、校長の話はこの学校でもクソ長い。

「まったく、義務教育を過ぎてもこれか。世も末だな」  
窓の外を見つめながら俺はつぶやいた。だが、

「そんな退屈を解決しちゃいましょー!!」

奴が来た。奴は俺の顔を人差し指でつつきながら更に続けた。

「首垂れてしよげてんなって。先が見えないだろ」

「いや、首垂れてないけど。でもお前にしちゃいいこと…」

「って、アムドライバーのOPでもいつてるだろ」

「結局アニソンかよー!!」

奴の名は黒谷昭彦。<sup>くろたにあきひこ</sup>自称オタクのアニメバカで、小学校からずっと同じクラスだった。

「でも解決って言ったって、どうやってだよ」

「部活作り」

「よしわかった。とりあえず精神病院に行こう。いい医者を紹介する」

「お前は地獄に行くか?いつから俺は精神不安定者になった」

「はあ…で、どんな部活をだ?」

「DNAクラブ」

「それはエスオー〇ス団のパクリと受け取っていいのか?」

「ああ」

「一応聞いておくが何の略だ？」

「『Don't Normal Amusement《ドント ノーマル アミューズメント》』。普通じゃない娯楽」

「結構まともだな」

「だろ！？そうだろ！？俺も気に入ってるんだ！！ドントノーマルは造語だけ！！」

「でも入らんぞ」

「そうはいかん」

こいつは何を言ってるのだろう。俺は確かにキョ○ン的な役所だが、彼同様に

わけのわからん妙な団体に入るのは御免被<sup>ごめんじむ</sup>りたい。

「これを見る！！」と昭彦が突き出したのは再来年までの生徒会メンバーが書かれたA4用紙だった。でもおかしい。

「生徒会なんてまだ決まってもいないだろう？なぜお前がこんなものを持っている」

「俺の手にかかれば校長を操る事など赤子の手をひねるようなもの。今年から数えて3年分の生徒会メンバーを勝手に決める許可を得るのもまた然<sup>しか</sup>りだ」

「入学初日に校長を操るお前はある意味で天才なのかもな」

「と、いうわけで今年の生徒会役員その2はお前。ちなみにその1は俺な」

御免被れなかった。ああ、今ほど自殺を志願した事は生まれてこのかた一度も無かっただろう。…どこかに拳銃とか転がってないかな  
「5時に旧体育館で待ってる！1秒でも遅れたら公開羞恥プレイな  
！」

昭彦は満面の笑みでそう言い残し、風のように走り去った。

明後日の方向を向く俺には、既に嫌な予感がしていた。とうとうこの学校にも吹き荒れるのか。昭彦という超巨大台風が。…5時って  
言っと放課後だよな。しょうがない、行くか。

さて、ここは放課後の旧体育館。本当は来たくなかったのだが、昭彦は有限実行という言葉をそのまま擬人化したような存在であり、言った事は全て実行しなければ気がすまないやつなのだ。俺も俺とて弱冠<sup>じやつかん</sup>16才で羞恥プレイは避けたいため、こうしてしぶしぶ来てやったのである。もう一度言うが、ここは旧体育館。防音完備で更に暗幕を閉めれば外からは何も見えないこの空間には、謎の機械がごろごろ転がっている。…ここ学校だよな？米軍のA級軍事基地とかじゃないよな？

「DNAクラブ3人目のメンバーはこいつだ!!」

昭彦がとてつもなくうれしそうにある男を連れて来た。

「よう!!石和!!」

「慎二!!お前も巻き込まれたのか!!」

こいつの名は稲村<sup>いなむらしんじ</sup>慎二。空気を読めないダメ人間で、別名エアクラツシャー。こいつもまた小学校から同じクラスなので、どんな奴かはハッキリとわかる。

「なんでまたお前が？」

「来ちゃいけないのか？」

「いや、いけないってわけじゃないけど」

「じゃあいいじゃん」

「…まあな」

慎二から目を放し俺は、昭彦の顔を睨<sup>にら</sup>みながら問い詰めた。

「お前、また脅迫したろ」

すると昭彦は怪しい笑顔で空を仰<sup>あお</sup>ぎ、「どうかな」と一言だけ言い返した。

その言葉には確かに悪意が込められていた。

## 集結するバカ共（後書き）

百鬼夜光です。

さあ始まりました、百鬼夜光作品第2弾。

今回はカジノ・ポリスからキャラの流用をさせてもらいました。

すみません。キャラの名前が思い浮かばないものですから…

とにかく、第2弾も生温かい目で見守ってください。よろしくお願いします。

## とりあえず全国の生徒会に謝ろう

次の日、本格的な活動が開始された。

会長さん曰く「変わった遊びをする部活」らしいのだが、何をする気かさっぱりわからない。もっとも、この部活は生徒会としても活動しているため学校側に迷惑がかかるような大きな事は出来そうもないがな。

「最初のゲームはこれだ」

昭彦が黒板にゴンゴンと音を立てて何かを書いた。

「えーと、『いし…か…ず…い…じ…め』っ」

「ちよつと待て！何書いてんだ昭彦！って言うか慎二！お前どこから持ってきた！そのいかつい兵器！…」

「なぜ待たなければいけない？」

120mmマシンガンと小型ビーム砲をそれぞれ構えた2人の悪魔が口を尖らせる。

どうやら俺が止めなければ本当に殺る気だったらしい。こいつら…

「とにかく何かほかのにしる。ほかのに」

「よーし。じゃあこれだ」

黒板に書かれた遊び。それは、『大爆笑ビデオ3連発』なるものだった。

妙な寒気が背中をよぎる。

「このゲームは、『ただ単に面白いことをビデオに撮影して、コ

コ動画に投稿しよー！』というゲームだ」

「時間があればこそできる究極の暇人専用ゲームだな」

「まあそう言うなって。じゃあスタート！…」

1番手：慎二 タイトル『オヤジギャグを言ってみた』

「どーも。最近布団がふっ飛んだシンです。」

いや、アルミ缶の上にあるミカンというのはおそろしや。

ロシアの殺し屋と同じくらい恐ろしや。あ、でもナイスな椅子に座っていればそうでもないか。ところで……」

「……………うわぁ」

「変な声吹き込むなよ！撮り直しになっちまうだろ！」

「あ、いや、その……いいや。撮りなおさなくて。と、とつてもおもしろかったし……ね」

「そう……だな。うん。よ、よし！次は俺の番だ！」

「お！やるか石和ウー！」

「おい待てよ！俺の動画は！？」

「……とつても面白うございました」

「なんで丁寧語！？まあ……そうか？面白かったか？やっぱりな。俺も自信あつたんだよ、今回のギャグ。特にさ……」

よかった。すしがねい筋金入りのバカで。

なんというか、こいつアレだな。新世紀アホンゲリオン。

スベっちゃだめだスベっちゃだめだスベっちゃだめだスベっちゃだめだ……なんてな。

2番手：俺　タイトル『いつもの風景』

「おい昭彦。そろそろ飽きてこないか？」

「それもそうだな」

「うわ！自分勝手！俺いじめられただけ！？稲村慎二はサンドバツクじゃないよ！？」

「……なんだってええええええええええ！？そ、そうだったのか！？」

「なにその新鮮な反応！君たちは俺をサンドバツクだと思い込んでいたらしいな！」

「……はい！世界共通の常識であります！（キリッ）」

「『キリッ』じゃねえよ！無駄にさわやかな笑顔やめろよ！気味悪い！」



「さて、冗談はこのくらいにして…」

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

泣きながら走り去る慎二。それを見ながら大笑いの俺たち。まさにいつもの

風景だ。楽しいなあ。あ、ちなみに昭彦の動画投稿は慎二逃走により中止となった。べ、別に作者が思い浮かばなかった訳じゃないんだからな！か、勘違いするなよ！

…こほん。と、いうわけで。俺は優勝したのだが、賞品というのがまたぶっ飛んでいた。その名も『昭彦様の肩を叩ける券』。昭彦は懐<sup>ふところ</sup>からそれを取り出し、笑顔で手渡してきやがった。なんだろうな、この胸の高鳴り。人はきつとこの感情を殺意っていうんだろう。…そうだ。エジソンもビックリのナイスアイデアを思いついた。

「昭彦、早速これ使わせろ」

予想外の言葉だったんだろう。「ん？いいよ」とひとつ返事で返してきた。

じゃあ始めるか。右手にメリケンをはめて…

「いくぞー。せーの…」

ごきやつ。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！」

空から飛来したイオンクックのような奇声を発しながら昭彦は、保健室を求め走り去っていった。右肩を抑えていたのは何でだろう？  
っていうか昭彦、

保健室は反対方向だぞ？

## とりあえず全国の生徒会に謝ろう（後書き）

遅くなりました。テスト期間終わっただんで投稿再開です。  
まだまだ未熟なので、よろしければ感想にて評価お願いします。  
では。

## RPGやっててHPギリギリの時、中級モンスターにエンカウントすると何と

放課後。部室に来た俺と慎二を待っていたのはゲームに熱中した昭彦だった。

「しまった！！さっきの所でBではなくてAを選んでいればいまここでこの話にならなかったのに！！あ、でもそうしたらスペシャルカットが手に入らなかった。とするとあの選択はあながちまちがえてはいなかったか！いや待てよ。仮にあそこでAを選んでいたとして…」

わけのわからない言葉をごによごによ呟きながらコントローラーを操作しゲームを終わらせた昭彦は、

「石和！慎二！今回の遊びはこれだ！！」

と言つて、黒板に『色々とすごいゲーム』と書いた。

「なんだこれ」

「いや実はさ、俺この前ゲーム屋でものすごいゲーム見つけたわけよ」

「で、俺にやれと」

「察しがいいな」

「断る」

「そうはいかん」

「まさか…」

「この手紙を公表されなくなったら素直に言うことを聞け」

「なんだこれ…」

「ふふふ」

「な！？」

「ふふふ」

「貴様！！いったいどこでこの手紙を！？」

「さて・・・どこでしょう」

「○泉っぽいしゃべり方すんな！！」

「と、いうわけで」

「わけで？」

「言うことを聞かないと」

「聞かないと？」

「おい、慎二。おもしれー物見せてやるよ」

「なにになになになに」

「待て！！わかった！やる！やるからその手紙を衆目にさらすのはやめろ！！」

「そうこなくっちゃ」

昭彦は嬉しそうに駆け寄ってきた慎二を殴りとばした。

昭彦が用意したゲームは1人用のゲームで、3人でしゃべりながら俺のプレイを見るらしい。録画用カメラを嬉しそうにセットしている昭彦がそう言っていた。

慎二（以後慎）「タイトルは・・・『死亡村？』！？」

石和（以後石）「おい昭彦！この禍々《まがまが》しいタイトルはなんだ！即死か！？主人公即死か！？って言うか『？』はどうした！『？』は！？いきなり『？』ってどうかと思うぞ！！」

昭彦（以後昭）「そんなことどうだっていい・・・（ア○ン風に）」

石&慎「よかねーよ！！」

石「まあいいや。とりあえずプレイしてみよう」

ゲーム音（以後ゲ）「シュジンコウノナマエヲニューリヨクシテク  
ダサイ」

石「か…ず…き…つと」

ピコン！！

ゲ「ハッ！！しけた名前だな！！」

石&慎&昭「！？」

ゲ「『カズキ』デヨロシイデスカ？」

石「今何か言ったよな！しけた名前って言ったよな！」

昭「いや……何を言ったか知らないが、いい事を言っていた気がする」

ゲ「アナタハユウシャニナリ、コノセカイヲマオウノテカラスクツ  
テクダサイ」

石「なんとベタな」

魔王（以後魔）「我が名はカエル・ザ・ドコンジョー。貴様には死んでもらう！！」

慎「いきなり！？っつーか魔王ど○性ガエル！？」

テリロリリン！！戦闘スタート！！

デندنデندنデーン……魔王が勝負をしかけてきた！！

「ゲ・カズキはどうする？」

石「まずは攻撃だろ」

ゲ「カズキは魔王に10のダメージを与えた！！魔王の攻撃！！カズキに

4 9  
1 8  
3 2  
2 5  
1 9  
3 8  
2 4  
6 1  
8 5  
8 4  
6 1  
5 5  
4 8  
5 5  
3 6  
1 4  
6 8  
の 2  
ダ 5  
メ 3  
ー 5  
ジ 8  
! 4  
! 5  
4 4  
2 2  
7 7  
9 9  
8 8  
5 5

カズキは息絶えた」

石「強！！魔王強！！何このチート！！」

昭「大丈夫。こんな事もあるかと用意しておいたのだ」

慎「何を？」

昭「おい慎二。お前の手元に赤と青、2つのスイッチがあるだろう」

慎「んなもんないよ……って、あった!? いつの間に!」

昭「赤い方を押せ」

「いやな予感が……」

昭「心配するな。安全だ」

慎「本当に？」

昭「ああ」

慎「じゃあ……えいっ!!」

昭「嘘だけど」

「！！！！！！！！！」



執「屋敷を売り払ってしまったら、食品偽造をあばいたり、八百長を見破ったりしたあの努力がすべて水の泡に！！」

魔「良いと言っておるのじゃあああ！！」

執「…わかりました。では、ご冥福をお祈りしております」  
ピコン。

魔「これで良かったのだ…ガクッ」

魔王を倒した！！カズキは経験値を13手に入れた！！

石&昭&慎「……………」

石「なんか罪悪感たつぷりなんですけど」

昭「珍しいな。俺も同意だ」

慎「っつーか獲得経験値少ねえ」

昭「でも、これで次のステージへ…」

そうだな。今回のステージはちよつと変わっていたんだ。そうに違いない。次のステージへ行けばきっと普通の敵と戦えるさ。

…と、思っていたのだが、画面に現れたのはスライムでもなければキラーマシンでもなかった。

たった…たった4文字である。

おしまい

石&昭&慎「終わりかよ！！」

RPGやっててHPギリギリの時、中級モンスターにエンカウントすると何と

どうも。活動報告やその他の機能がやっと思えるようになってきた百鬼夜光です。

まあ使えるとは言っても10分の2ぐらいですが（笑）。

さて、今回は少し長めに書いてみました。毎回観覧してくださる皆様、本当にありがとうございます。1人でも見てくださる方がいるとそれだけでやる気が出てきます。評価の程をよろしく願います。



新たな被害者がまた3人…ご愁傷様

さて、DNAクラブが結成されて約半年。特に何もする事が見当たらずにぐだぐだと過ごすのにも飽きてきた。最近の趣味といえは：あれだな、現在進行形で着用中の制服の毛玉を素手で取り続けること。結構な暇つぶしになるし、掃除の手間も省ける。一度試してみたいかが？

…と、ここで会長さんのご登場だ。部室に入るや否やそくさとか何かの準備を始めた所を見れば、今日は何かをするらしいという事は分かる。古代エジプトの太陽神ラーを呼び寄せよう、とか言うんじやないだらうな。

「安心しろ。それはまた今度の機会だ」  
今度やるのか。

「それより今日はミーティングだ。お前らも早く準備しろ」

ミーティング、という中学校の部活引退以来ほとんど聞いた覚えのない言葉に多少の思い出をフラッシュバックさせながら、俺はしぶしぶ机の上を片づける。

「それはそうと、ミーティングって何するんだ？」

「今日は新入部員が3人もやってくる記念すべき日だ」

[illegible]

慎二が絶叫し、更に続ける。

「この目的不順でわけわからなくていつも勝手な事やってる集まりに3人も!？」

昭彦が青筋を浮かべる。

「生徒会と部活を両立している唯我独尊な集まりに3人も!？」

次に歯ぎしりを開始する。

「おまけに常人じゃ理解不能な馬鹿げた考えを無理矢理部下に押し付ける極悪非道な……」

最後に脳内で何かがはじけ飛んだ。

「ほう貴様、極悪非道な…なんだって？ええ？」

「あ、いや、その…」

「ちーとツラ貸せや」

「は、はいい！！」

「たつつつつつつつぷり遊んでやる」

「ひいひい！！」

バキッ！！やらメキヤッ！！やら、人間の体から鳴ってはいけない音がどんどん聞こえてくる。「うきよおおおおおおお！！」という断末魔の5秒後、見るに堪えない慎二の姿が帰ってきた。

「さて、本題に入る」

「ホントに3人も来たのか？」

「ああ。しかも、男子が1人で女子が2人だ！！」

「女子！？」

「驚いただろ」

「結構」

「前ふりはこの程度にして、これから歓迎パーティーを始める」

「わーーーーい！！」

無邪気に喜ぶ慎二。どうやらパーティーという言葉聞き激しく興奮しているらしい。

「おーい、入ってこーい」

「こーい」

と、ここで奴隷解放宣言直後の民衆よろしく上機嫌にスキップで入ってきた3人を軽く紹介しておこう。

1人目は、あさひくらさか朝倉涼香。

肘まで伸びた長い髪に、眼鏡越しに見える大きくて黒い瞳。どこか怪しげな雰囲気漂わせる彼女からは、幼馴染と思えない大人びたオーラを感じる。

次に2人目、うすいおとは笛吹音波。

これまた長い髪をツインテールに結いである、見た目からするとあきらかなツンデレ。だが違うらしい（本人談）。

最後に3人目、笛吹宗介。つすいそしすけ

名前で推測できると思うがこいつは音波の双子の弟で、なぜか右と左の目の色が違う。カラコンでもしてんのか？

とまあ、こんな感じだ。ところで…

「何でこの3人なんだ？お前が推薦したんだろ？」

「いや、一年目の生徒会推薦は俺と石和とダメ人間の3人だ」

「せめて名前で…」

「黙れ。くたばれ。地獄に落ちろ」

「ひどいや！」

「で、何で？」

「実はな、あいつらが3人一緒に俺の元へ頼みに来たんだ。『DN Aクラブに入会させてー！』って」

「世の中には、科学で解明できないことがあるんだな…」

「どういう意味だよそれ！」

「だってそうだろ。この奇妙奇天烈摩訶不思議な集まりに自ら入ってこようとする奴の存在など普通に考えているわけがない」

「ドラ もんのエンディングっばい！」

「二足歩行可能兼人工知能搭載型国民的人気猫型便利機械の事か？」

「無理やり和訳すんなよ！そんなアニメあっても視聴率0%だわ！」

「で、結局どうして？」

「わからない。だからこれから聞こうと思う」

「なるほど。それがこの歓迎パーティーということか」

「その通り。よーし3人とも、この生徒会に入りたいと志願した理由を教えてくれ。あ、言いにくい場合はそこにある嘆きの穴へどうぞ」

昭彦が指さした所には汗だくの慎二と共に謎のボックスがあった。指示される前に動いていた慎二の謎はノータッチで頼む。

「さーて誰からだ？音波からか。そーかそーか」

「ふえ！？な、何で私！？」

「さっすが我が姉貴！頼もしい限りだ！」

「がんばって！音波ちゃん！」

「宗介！？涼香ちゃん！？」

「じゃあどうする？あっち行くか？ここで言うか？」

「…あっちでお願い」

「りょーかい！じゃあ行きましょうか、お嬢様」

「…はふう。うまく説明できるかなあ…」

半分泣きながらもいかついボックスに拉致られて行った美少女を見つめながら、なにやら面倒な事が起きないようにと切に願う俺であった…

## 新たな被害者がまた3人…ご愁傷様（後書き）

お久しぶりでーす。百鬼夜光でーす。やっと更新できましたよー。  
何で春休みに宿題ってあるんだろ。新学期の準備じゃないのかよ…  
まあ愚痴ばっか言っても進歩がないので今回はこの辺で。  
次の更新は早めに行けるようにがんばります。ではでは。

## 避けられない現実

（ボックス内（昭彦視点））

「で、なんで入ろうと思ったんだ？」

「それは…その…」

「もしかして、理由無し？」

「いや、そうじゃなくて…その…」

「はつきりしてくれ。後が詰まってるんだ」

「えと…何て言えばいいのかな…危機が…迫ってるの。DNAクラブに」

思わず眉を寄せ、首をかしげる。

「危機って…どんな？」

「TOS」

「なんだそりゃ」

「the reverse side of students' association」

「もつとわからん」

「ザ・リバーサイド・オブ・スチューデントズ・アソシエーション。読んで字のごとく、裏の生徒会のこと」

「裏の生徒会？聞いたことがないな。お前の妄想じゃないのか？」

「ううん。確かに存在する。だってそいつらに対抗するため、私はこのDNAクラブに入会志願したんだから」

「っていうことはつまり、宗介も同じ理由で？」

「うん。でも、詳しい事は宗介から聞いて。私、何かを説明するのが苦手なの。…でも、これだけは言える」

音波はひとつ深呼吸をしてから、改めて口を開く。

「気をつけて。相手は本気でDNAクラブ全員を殺す気よ」

「……………」

啞然。フィクションであってほしいのだが…

「ありがとう。とりあえず次は宗介だな」

やっと喉の奥からひねり出したのはそんな言葉だった。まるで音波から…いや、現実から逃げるように。

まあ、実際にそんな訳のわからん団体があつたとしても、全員に鉄拳制裁を下してやるから大丈夫か。

〈ボックス外（和希視点）〉

妙にニコニコしながら音波が謎ボックスから出てきた。それと同時に宗介が椅子から立ち上がる。

「次は俺だな。ねーちゃんの事だから何も説明できてないだろうなあ…結局俺が全部説明するのか…」

腕を組みながらゆらゆらと歩いて行く。元気なさそうだなあ。さつきスキップしてたのに。もしかしてドーピング？元気よく見せるための薬物乱用ってか？…ないない。

と、ひとりツツコミをしている間に憂鬱そうな少年は暗い入り口に吸い込まれていった…

〈ボックス内（昭彦視点）〉

「TOSってなんだ？」

「…は？」

開口一番に尋ねてみた。詳しく教えてくれよ。

「TOSっていうのは…」

「ザ・リバーサイド・オブ・スチューデント・アソシエーション」  
「知ってんじゃない」

「そこまではな。あと俺たちの命が狙われているって事も音波から聞いた。そこで、なぜ俺たちがそいつらに狙われなくてはならんのか、並びにその目的とは何かを教えてくれ」

「ああ。TOS…奴らは『裏の生徒会・TOS』として生徒全体の実に98%もの生徒に爆発的な人気を獲得している」

「98%！？俺たちの人気は何処へ？」

「さあな。お前らの人気なんぞカケラほどじゃないのか？」

「何故に！？ちゃんと生徒会として機能してるぞ！集会も定期的に行っているし、部活動の部費だってしっかり管理している！なのに何故反感を喰らわなくてはならない！」

「落ち着け。少しぐらいなら調べてある。…やつらは、お前ら生徒会のやり方が気に食わないらしい」

「やり方？何の事だ？」

「この学校には、『いじめ』が蔓延している…っていう事実を知らないだろ」

「ああ、知らない。例えばどんな？」

「理由もないのに誰か1人を集団でリンチしたり、毎日教師全員から無視されたり」

「そんな事が…ならば対処しよう。今からでも十分…」

「間に合わない」

「どうして？確かに気づくのは遅かった。だがこれから迅速に対応すればなんとかなるだろ」

「いじめ被害者の一覧に、『要一』<sup>かなめはじめ</sup>という名前があった」

「要…名前だけは聞いたことがある。確か、かなりの不良でみんなから嫌われている問題児だったよな」

「どうやらそいつが長になつてTOSが誕生したらしい」

「おいおい。まさか問題児軍団相手に俺が勝てない、とか思って間に合わないなんて言ったのか？」

「それは違う。一般人相手にお前が負けるハズがない」

「それはあれか？TOSってのは一般人じゃないってことか？」

「その通り。TOSはただの問題児軍団ではない」

「と、言うത്？」

「奴らはわけのわからん異能力者達で、手から炎が出たり口から冷



気を出したりと愉快な化け物の集まりだ。下っ端の方は一般人だが」「うわぁ…何その中二病的設定。そんな奴らがいるんだったら邪気眼だって実在するかもな」

「石和の右目がそうだ」

「…悪い。よく聞こえなかった。もう一度頼む」

「石和の右目がそうだ」

「よし、精神病院へ直行だ。腕の立つ医者を紹介しよう」

「まてまてまて。一応シリアスなムードなんだから正直に受け止めるよ」

「…はぁ。で、なんだって？石和の右目が邪気眼？ハッ！冗談は無しにしようぜ」

「冗談じゃない。っていうか、邪気眼なんていくらでもあるぞ。俺の右目も、慎二の右目もそうだ」

「俺は？」

「違う。それらしい気配を全く感じない」

「ひでえ…何この絶望的な疎外感…」

「とはいえ、邪気眼は所持している者によって能力が違う」

「そうなのか？俺、邪気眼ってネットでちょこつと見ただけだから、ほとんど知らないんだ。よかったら教えてくれ」

「よし。じゃあ今日の夜、お前の家に行ってもいいか？邪気眼の事と、今回の事件について詳しく話し合いたい」

「わかった。…そろそろ潮時だろう。涼香を呼んできてくれ」

「了解。…おい、涼香」

宗介が嘆きの穴から出て行った。今考えてみれば3人って結構疲れるな…

…それにしても遅いな。ただ呼んでくるだけだろ？

「どうした。早く涼香を呼んできてくれ」

「いや、その涼香がいないんだ」

はぁ？そんなわけないだろ。入会初日から会長に無許可で早退するやつがいたら土下座でバク転してやる。

どれどれ……

「おい、土下座して何を…ってうわあ！危ねえ！いきなりバック転すんなよ！っつーか物理的におかしいだろその動き！」

「はあ、はあ、ど、どうしてないんだ？」

「あ、あの、涼香ちゃんならバイトがあるから…って先に」

2回転目に突入しようとした時、音波の声が聞こえた。いつの間にか全員ボックス内に入ってきている。

「そうだったのか。ならば仕方がない。…よし音波」

「ん？なあに？」

「今日の夜、宗介と一緒に俺の家に来い。慎二と石和もだ」

「別にいいけど、何で？」

「TOSについて色々話し合いたい」

「TOS？何だそれ？」

「いいから。お前と慎二には後で伝える」

「なあ」

「どうした慎二？」

「おやつはいくらまで？」

「よーし今日はこれにて解散！」

慎二以外『乙でしたあゝ』

「ええ！？完全スルー！？」

さて、早く家に帰って茶菓子の準備でもするかな。夜が長くなりそうだ。

## 避けられない現実（後書き）

どお〜もお〜。

あらずじで使ったセリフが未だ本編に出てこないDNAクラブ第5話でございます。

TOSにどんな奴らを出していこうか、正直悩みどころではありますが、いつも通り生温かい目で見守ってやってください。お願いします。

…できれば小説の宣伝の仕方も教えて下さい。

「このところ『普通じゃない遊び』やってないな…」とかシッこんだら負け

この話は昭彦目線で話が進みます。

「ここどころ『普通じゃない遊び』やってないな…」とかツツこんだら負け

「あー気持ちいい」

若干熱めの風呂に入り、半分夢見心地でつぶやく。今日も色々あったな…

妙な組織の話もされたし、入会初日の美少女に逃げられるし。

まあ、今日も今日とて、生き抜いたことに変わりはない。死ななくてよかった〜

『おにいちゃん！お客さんだよ〜！』

つと。インターホン 俺による改造済み が呼んでいる。とりあえず返事はしておこう。

…と思った矢先だ。突然玄関の扉が開き、ラフな服装の4人組がずかずかと侵入してきやがった。

「おじやましな〜すって、昭彦は一人暮らしか」

「昭彦〜どこに隠れている〜」

「すでに包囲は完了しているのよ…嘘だけど」

「出てこないならお前の秘蔵エロアニメコレクションを全員に暴露するぞ〜」

待て。アレはお前以外に見せる気のないシロモノだ、石和！

「っていうか、何でお前らがここにいる!？」

風呂から超速であがると、そこには首をかしげている4人がいた。

「何でつてお前…」

「行くつて言つておいたよな？」

「しかも来いつて自分から言つたわよね？」

「もしかしてお前…」

「…」 「大事な話がある事、忘れたのか？」 「…」

「忘れるワケないだろ」

大事…？えーと…帽子からハトポップマジックのタネについて？…違ふよな。じゃあなんだ…あ。

「TOSとその他もろもろについてか？」

「何故に疑問符？その他に何がある？」

「帽子からハトポツポマジックのタネって知ってるか？」

「知らん」

「あ…そ…」

「いきなりなんだよ……じゃあ始めるか。宗介、頼む」

「了解。涼香がいない事については、後でまとめて話す。全員座って話が聞こえる隊形になれ」

「「「おー」「」」」

「……………」

「…慎二。耳を塞ぐのがお前流話の聞き方なのか」

「…え？何だつて？」

「ぶっ殺してえ…いいから慎二、真面目に聞け。これから俺たち笛吹コンビ、並びに鈴香の身柄情報を説明する」

「…わかったよ。耳栓を外して…始めていいぞ」

「耳栓もしてたのか…こほん。じゃあ始めるぞ。昭彦、ルーズリーフ用意しろ」

そこらに転がっていたルーズリーフとシャーペンを手にし、アイコンタクトで説明を乞う。

ちなみにTOSそのものと邪気眼の存在については、ここへ来る途中2人の笛吹が石和と慎二に説明したらしい。

「俺、笛吹宗介と、その姉である笛吹音波、そして朝倉涼香について話そう。実は俺たち、ある組織に所属しているんだ」

「何て名前の組織なんだ？」

「邪気眼所持者育成所…通称『育成所』だ」

「そのまんまだな…まあいいや、その方がわかりやすい。続けてくれ」

「その育成所っていうのはな、邪気眼を持つ者を育てるための学校のようなものだ。俺や姉ちゃん、涼香もそのメンバー」

「じゃあ、お前ら3人は同級生みたいなもんか」

「あくまで『みたいなもん』だけどな」

「大体の事はわかった。次は邪気眼について教えてくれ」

「おう。邪気眼っていうのは、特定の者にだけ使える特殊能力のことだ。そのため、ひとつひとつに違う名前と能力がある」

「例えばどんなのがあるんだ？」

「そうだな…俺の邪気眼は、無限跳躍と書いて『インフィニットジャンパー』。能力は空中移動」

「それって便利なのか？」

「えーっと、空気を蹴って無限にジャンプする事ができたり、ホバリングで移動できたり。ちなみにホバリング時の移動速度は音速の約3倍だ」

「すげえ…他にも教えてくれ！なんか特殊能力って燃える！」

「超電磁砲と書いて…」

「それは色々危ない気がするから言っな！」

「こっ、コインをだな…」

「やめれ！…そうだ！音波と涼香は？」

「姉ちゃんのは知ってるけど、涼香のは知らない」

「何でだ？お前らって同級生なんだろ？」

「それが、なぜか涼香のは誰も知らないんだよ」

「みんなって…育成所のやつらか？」

「ああ。育成所に所属する邪気眼使いデータは、マザーコンピューターに記録されているんだ。でも、涼香のだけパスワードがかかっている」

「じゃあお偉いさんは知ってるんじゃないのか？」

「いや知らない。以前俺が立ち会って解析に挑戦したんだが、寝ずに3日挑戦し結果は失敗。パスワードを知ってるのは涼香だけだと考えられる」

「そうか…じゃあ、音波のは？」

「本人が直々に解説したほうがいい。姉ちゃん、お願い」

「わかったわ。私の邪気眼は、至高の癒し手と書いて『トッブワン

ヒーラー』。能力は超回復」

「何を回復するんだ？　つつーか、回復だけじゃ戦えないだろ」

「確かに戦闘能力は低いけど、その分仲間の傷を回復できるから便利なの」

「ほう…で、涼香の邪気眼はやっぱりわからないのか」

「全てが謎に包まれているわ」

「やっぱりそうか。まあ、期待はしてなかったけどな」

「悪かったわね。それでも色々調べたのよ？　例えば…」

『おにいちゃん！　お客さんだよー！』

「…客だ。悪いが後で聞かせてくれ。はい、どちらさまですかー？」

「…今の呼び出し音…引くわ」

「がっちゃん…ってあれ？」

俺の目の前にいたのは小さな女の子だった。しかも普段からよく顔を合わせている…

「明日香じゃねーか！」

慎二の妹。その名を、いなむらあすか稲村明日香という。

「どうした？　兄貴を迎えに来たのか？」

「んーん」

「じゃあ何の用でこんな所に来たんだ？　しかもこんな時間に」

まだ10時過ぎだが、小学5年の女の子がうるついていいような時間じゃない。

「アッキーに用があるの。2人つきりで話したいんだけど…ついて来てくれるかな？」

「別に構わないが…今は大事な会議中だから明日でもいいか？」

「えっと…今からがいい。5分くらいで終わるから、ね？」

「……わかった。ちよつと待っててくれ」

俺は、事情を全員に話してから我が家を後にした。

「…で、どこまで行くんだ？」

「アッキーの家の前。あそこの公園」



「近いな。じゃあ行くか」

俺はあくまで保護者的な意味で明日香と手を繋ぎ、我が家の目の前、この時間なら人も滅多にこない公園までやって来た。

「で、話ってなんだ？」

「んーとねえ…」

俺から10メートルほど離れ、楽しそうにくるくる回る明日香。しばらく止まらないと踏んでいたのだが、数秒後にその回転は止まった。

「死んで」

「…は？」

瞬間、炎を纏った槍を手にした明日香が俺に突撃してきた！

「のわあっ！！」

とっさにしゃがみ頭を抱えると、その頭上をすさまじい勢いで明日香が通過する！

ドガシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！と、鼓膜が破裂せんばかりの轟音の後、煙の中から出てきた明日香は、

「あちゃー。はずしちゃったか」

かわいくウィンクしつつ舌を出した。だが、俺の後ろにあつたはずの街灯は跡形もなく消え去り、代わりに残ったのは数えきれない数の破片と紅蓮の炎だった。

「お前…その腕…」

明日香は右腕に目のような模様が浮かび上がらせ、不敵に笑う。

「私はTOS四天王のひとり。邪気眼・伝説の炎の使い手、紅蓮のアスカ」

「四天王…？そんなものがあるのか？」

「知らないなら教えてあげる。TOSには、四天王と呼ばれるトッブクラスの邪気眼使いが4人いるの。で、私はその内の1人」

「っつーか、風下高の生徒じゃないお前がなぜTOSに！？」

「それはマスターに聞いて。私は自分の欲望に従っただけ」

「欲望…？マスター…？何だよ、それ…」

「それは教えないよ。教えちゃったら面白くないもん。…さあ、そろそろ2発目いくよ。今度は外さないからね」

「ちょ…おま…」

くそ、足が震えて動かない！逃げたいのに逃げられない！こんなところでオダブツはごめんだ！

「死んじゃえー」

「うわあああああああああ！！！！」

絶叫した直後、俺の視界は真っ暗になり 目をつぶったんだから当たり前だが 体がとてつもなく軽くなった気がした。  
まるで…そう、宙に浮いているかのように。

「このところ『普通じゃない遊び』やってないな…」とかツツこんだら負け

久しぶりです！百鬼夜光です！

若干レー○ガンをパクっているのは気のせいです。

どこか似てたとしても他人の空似です。嘘っぱちです。

…こほん。というわけで、やってきましたTOS四天王1人目、  
紅蓮のアスカ。

思いつきり中二病なところも無礼講つてことをお願いします。

それではいつも通り、評価&感想をお願いします。

追伸：次の更新はもっと早めに頑張ります。

## 開幕前夜

「おゝ、浮いた浮いた」

「っていうか、飛んでった？いや、跳んでったのか。」

「昭彦の体は言葉通り跳んでいった。もちろん、昭彦だけの力で跳んでいったわけではない。字の使い方でわかると思うが、一緒に跳んでいったのは宗介だ。」

「音波、昭彦と宗介はどの辺まで跳躍したんだ？」

「さあ？ 多分、飛行機よりは高い所じゃない？」

「なるほど」

「……………は？」

「上空」

「うわああああ！もうだめ！もうだめ！さすがに死んだ！」

「俺は死んだに違いない！だからふわっと体が浮いたんだ！」

「落ち着け昭彦。お前は死んでない」

「どこからか聞いたことのある間抜けな声が聞こえる！」

「ああ、落としてえ！ハヤブサの急降下速度より早いスピードで落としてえ！！！」

「そのツツコミは宗介か！！」

「ああ。今お前は空を飛んでいる」

「それは見ればわかる。…ああ、影絵やりてえ」

「何だよ突然！？お前今TOS幹部と戦ってたんだぞ！？」

「そつか。俺は明日香に殺されかけて……………まあいいや。とりあえず影絵やろう。」

「8本足の犬」

「何その無駄にかっこいい影絵！！っていうか影できてねえし！！」  
「無意味な事をやり続ける、それがDNAクオリティ」

「ただのバカじゃねえのか!？」

「何ごちゃごちゃ言ってるんだ。戦闘中だろ。集中しろよ」

「こいつ後で殴ろう。そうしよう」

無意味な会話を繰り返り広げるうちに気付いた。

こいつ、右目から青い炎が出ている。

「おい、宗介」

「なんだよ」

「俺たち今どの辺にいるんだ？」

「う　い棒を縦に並べて5万本ぐらい」

「それではどのくらいか見当がつかない」

「気にするな。俺もわからない」

「なら言っなよ」

「・・・そろそろだな。行くぞ昭彦!しっかり目に焼き付けておけよ!」

「何を!？」

「これが邪気眼の使い方だ!」

思わず宗介の顔を覗くと、右目に炎が宿っていた!そして・・・

「フィニッシュコンボ・列脚強刃<sup>れっきやくしじゆうじん</sup>!」

上がってきた時よりも圧倒的に速いスピードで急降下していく!!

真下にいるのは・・・

「!？」

く地上く

ドガシャアアアアアアアアアアアアアアアア!

凄まじい速度で何かが何かにぶち当たった!!

本当に晴れるのだろうかと思いたくなるくらい量の土煙から顔を

出したのは、ボロボロになった明日香だった。

攻撃を喰らった本人が、弱々しく呟く。

「ごめんなさい、マスター・・・」

直後、明日香は先ほどまで持っていた槍から炎を噴出し、かなりの速度で飛び去った。

「行ったな」

宗介の右目の炎が消え、いつもの目に戻る。

片方が普通の黒目、もう片方が音波と同じ薄緑色。

ちなみに、音波の両目の色が元から薄緑色だということに今気付いた。

「そついえば俺、音波の顔しつかり見たのって初めてだよな」

「…キモ」

「誤解だ誤解！いくら俺でも視姦はしない！」

「それより昭彦、これからどうする？」

「明日の朝、緊急全校集会を開く」

「何か言う事でもあんのか？」

「ああ。だが明日は俺だけが話す。舞台にはクラブメンバー全員で上がるが、話すのは俺一人で十分だ」

「……」

「な、なんだよ」

「嫌な予感しかない」

「失礼な。じゃ、今日はこれで解散！また明日」

「あ、ちょ、おま……」

右手をひらひらと振りながら昭彦は家に帰って行った。

帰り道。俺と笛吹姉弟は3人で肩を落としていた。

「はあ……」

「余計な事しなけりやいいけど」

「考えてみる。アイツが余計な事以外した例<sup>ためし</sup>あるか？」

「……ない。」

「また明日から大変になるぞ」

「大変なのは元からでしょ」

音波のツツコミに頷く。確かに、昭彦とつるみ始めてからは毎日が大変だった。

だがしかし、俺は過去の思い出に浸っているほど暇じゃない。もっと大変な問題がある。

「明日香が…TOS…俺の妹が…TOS…」

## 開幕前夜（後書き）

石「おい昭彦。今回からこのスペース、次回予告に使うらしい」

昭「次回予告？いつネタが切れるかもわからない状況でよく言ったもんだ」

石「まったくだ。で、次回予告って何すればいいんだ？」

昭彦「次回の予告すればいいだろ」

石「そのまんまだな」

昭&石「次回！『施行！勝進制度』」

昭「石和の隠された過去が明らかに！！」

石「ならねえよ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7471j/>

---

DNAクラブ！！

2011年11月21日06時47分発行